戦争体験談　諏訪間 佐智子

二 度 と 戦 争 は い や ！

昭和１４（１９３９）年１０月生まれ
被災年齢　５歳
被災地　本所区 東両国（ 現墨田区）
家族構成は、父 、母 、本人 、妹
家は紳士服の仕立屋
本人は、戦後、地元(長 野）の企業で働く

私が空襲にあったのは、本所区東両国二丁目（現墨田区両国）という場所で、５歳の幼稚園児でした。毎日の ように空襲警報が発令され、そのたびに防空壕の中へ飛び込んでいる生活でした。母妹と３人暮らしで、父は 一年前に赤紙召集令状①が来て九州のほうへ行っているということでした。

今でも忘れられないのは３月の東京大空襲です。70 年以上も過ぎているのに鮮明に頭に焼きついています。 夜空が真っ赤になったり、空を照らすサーチライトの光がチラチラと見えたり、飛行機が降下する嫌な音が今でも耳に残っています。今、自分のまわりでものすごく大変なことが起きているというのは子どもでしたが感じており、大人の人たちの会話や行動をしっかり観察するようになりました。昼間は子ども同士で遊んだりしているときもありましたが、暗くなると、ものすごく不安になり、母親のそばを離れず顔の見える所にいました。いつ空襲警報が発令されるかわからず、ぐっすりと眠れるという日はあまりなかったと母が言っていました。

３月９日の夜も肌寒い日で、体が震えて夜中になって もなかなか眠れない状態でした。

そんなとき、どこからともなく B29 がゴオーッとも の すごい音で現れ、焼夷弾を短い間隔で次々と落とします。ヒューヒューと落ちる音、ドカンドカンと建物にぶつかる音、夜なのに昼間のような明るさでした。木造の 家はメラメラと簡単に燃えてしまい、私の家も居間と隣 の家との間に焼夷弾が落ち、ものすごい勢いで火の手が あがり、あっという間に家は炎に包まれてしまいました。夢中で防空頭巾をかぶり外へ飛び出しました。

そんなとき、私にとってはとてもつらい悲しいことが 起きました。それは大事にしていた赤い鼻緒の下駄を持 ち出すのをすっかり忘れ、「あっ、下駄が」と思い振り返ると、もう半分燃えていました。母に「見ていないで早くこっちへ来なさい」と手をひっぱられ、私はもうこれ以上出ないというくらいの大声で泣きました。着の身着のままで外へ飛び出したので、ふだん大事にしていた思い出の写真、お人形、ままごとの道具など、何も持ち出すことができませんでした。

今、私の手元には誕生から５年間の品物は何ひとつ残っておらず、頭の中に焼きついている思い出だけです。隣のおばさんや近所の人たちとどこをどのように 歩いたのか、走ったのか憶おぼえていません。母親たちが歩いて行く後から一生懸命についていきました。皆とはぐれてしまったら大変だと親子ともに声を掛け合いながら、大勢の人の間を縫

うように歩きました。道路もあちらこちらで火が燃えており、そのなかを人々が右へ左へと走っています。ポツンと残っていた缶詰工場の倉庫に 皆で集まりました。コンクリート造りだったので燃える のは免
れたようですが、かなり壊れており、雨風が少し は防げるような状態だと母親たちが話していました。そこで私たちは朝になるのを待ちました。

明るくなってまわりを見ると、何もかも燃えてなくなり、先のほうまで見わたせる焼け野原になっていました。いつも見ている風景とは全然違う別世界のようで す。あちこちから白い煙があがっているのも見えました。私たちはとりあえずこの倉庫で生活を始めました。 食べるものが手に入らない大変なときだったのですが、 ありがたかったのはそこが缶詰工場の倉庫だということ でした。外側が黒く焦げた缶詰があり、缶切りを持っていた人がいて開けてみると、中味は大丈夫でした。みん なで大騒ぎをしながら食べました。何の魚だったのかは 覚えていませんが、楕円形の缶詰でした。それからは缶詰を食べ、水を飲む、お湯を飲む、この繰り返しでした。最初はおいしいと思ったのですが、２回、３回と口 にするようになると飽きてしまい、何か違うものを食べたいと思うようになったけれど、母親たちが食べ物をあちこち探している姿を見たり聞いたりしているので、口 には出せませんでした。この倉庫があるのを知った人たちが毎日大勢来ては缶詰を袋に入れて持ち帰っていきました。

こんな生活は長くは続かず、１軒、２軒と田舎へ行く 家族が出てきました。最初は７、８軒くらいの人たちが 生活していたと思いますが、気がつくと半分くらいになっていました。私たちも父母の実家がある長野県の伊那へ行こうと、汽車の切符を手に入れるため駅に行きまし た。でも、駅には私たちと同じような人たちがいっぱい いて、なかなか切符を手に入れられる状態ではありませんでした。

その駅の近くに隅田川があり、ある日、駅へ行った帰りに川のほうへ歩いて行き、川岸に着いたとき、私は今 までに見たことがないような光景を目の当たりにしまし た。それは川の中や土手にあまりにも無残な姿の死体が あり、まともに見るのが恐ろしく目を背けてしまうほど でした。町の中にも黒くなった物体があり、母が手を合 わせて「亡くなった人だよ」と教えてくれたので、はじめて人間だったとわかり、驚きました。川岸の異様な光景で体が震えだして気持ち悪くなり、「お母ちゃん早く帰ろう」と母にしがみつきました。歩みを止めた母が 遠くのほうを見つめながら、「最後に一滴の水も口にできなかった人だろうね」と言って、手をつないでいる私 のほうに顔を向けて、「体に火がついて熱くて川の中へ 飛び込んだ人、皆さぞかし無念の思いだったことだろう ね。それに比べれば私たちは命だけでも助かったんだか ら、ありがたいよね。大切にしないとバチが当たるよ」と自分に言い聞かせるように話していたのが心に残って います。今になって思えば、母も精神的肉体的にも疲れ きっていたときだったと思います。

やっとの思いで田舎に着き、父の実家の物置小屋を整理して、六畳一間で親子３人の生活を始めました。母は 昼間はなれない農業の手伝いをし、夜は縫い物の仕事をしていま

した。食べるものは本家②の人から分けてもらっている生活でしたので、栄養などということにしては無に近かったと思います。この時期は世の中全体が食べるのに必死の時だったのではないでしょうか。こんな時に白い御飯を食べたいと密かに思っている私でした。

焼け出されてから田舎での生活が始まり、はじめての 暑い夏になりました。母が倒れてしまい、医者から体を 休めて栄養のあるものを食べなさいと言われて、私はどうしたらよいのかわからず、夜になって布団に入ると、 泣いてばかりいました。近所のおばさんが卵を持って 来てくれて、「戦争が終わった、日本が負けたらしいよ」と母と話していました。そんなとき、運良く父が九州 の内地③勤務から帰って来ました。痩せていましたが、元気な姿でしたのでとてもうれしかったです。母 も気持ちが落ちついたのでしょうか、秋には元気になり、またいつもの縫い物の仕事を始めました。それか らは親子四人で貧しいけれど、楽しい生活になり、子供のおやつは畑の桑の実で、口の中をいつも黒くしていました。

寒い冬が終わり、私が小学校に入学する昭和 21 年の 春、うれしいセーラー服姿で写真を写しました。でも、 靴ではなく下駄を履いていました。この時期は靴は簡単 に手に入れられるような状態ではなかったと思います。 私にとっては記念の写真がアルバムの一番最初のページに収まりました。私たちはそのまま田舎に根を下ろし、東京で体験した恐ろしかったこと、悲しいことなど を口に出す機会もなく、何事もなかったかのように過ごしていましたが、皆決して忘れる事はありませんでした。

私は時々母は強しと思うことがあります。それは勉強や仕事などに行き詰まったとき、困ったときなど、弱音を吐くと、母は真顔で「あの空襲のときの苦労を思えば、どんなことでも乗りきれる、大丈夫です」と言って励ましてくれました。ふだんは口にこそ出しませんでしたけれど、あの空襲のときの体験が田舎者で引っ込み思案の母を、強くたくましくしたのだとつくづく思い ました。

今も世界のどこかでは、国と国との争いで何の関係もない一般の人たちが巻き添えになり、大事な命を亡くしてしまう、こんなつらい悲しいことはありません。私達 は二度と過あやまちを繰り返してはならないと強く思います。

今の日本はありがたい事に平和です。これがこの先も 長く続く様に祈り、若い人達のこれからの生き方に大いに期待を致します。

赤紙召集令状①その時点で兵士ではない男性を軍隊に召集する命令状。
うすい赤色だったので「赤紙」と呼ばれた。
本家②一族のもとになっている家のこと。そこから分かれた家筋を「分家」と
言った。戦後、それまでの家制度が廃止され、法律上、こうした区別はなくなった。
内地③当時は、朝鮮・台湾・樺太を除いた日本領土のことをさした。